

令和5年度学校自己評価システムシート (県立所沢高等学校)

目指す学校像	多様な生徒一人一人に相応し、社会的自立を促す親身あふれる温かい教育
--------	-----------------------------------

重点目標	1 授業を大切にし、学習意欲を向上させ、基礎学力を定着させる 2 家庭や地域との連携を強め、教育活動を一層充実させる 3 学校行事等の多様な学びの機会を通じて、社会人として自立できる力を育成する
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	5名
	生徒	2名
	事務局(教職員)	5名

学校自己評価					年度評価 (2月2日現在)		
年度目標					年度評価 (2月2日現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	【現状】 英検準1級に合格して大学進学を目指す生徒もいれば、中学校初歩段階の学力が定着していない生徒もおり、学力の差が大きい。また、日本語を母語としない生徒も12名と増加している。 【課題】 個々の学力に応じた課題を与え、目標を持って学習に取り組ませるとともに、日本語を母語としない生徒の日本語理解度を高めることが求められる。	個々の目標達成に向けて主体的に学ぶ生徒の育成	①生徒一人一人の学力や理解度を把握し、個々に適切な目標を持たせるとともに、その達成に向けてきめ細かな指導を実施する。 ②個々の生徒に適した教材を提供することによって興味・関心を高め、家庭学習を含めて見通しを持った学習に取り組ませる。 ③日本語を母語としない生徒への日本語指導を始業前に週4日実施する。	①②生徒の授業満足度 ①②主体的に授業に取り組む生徒の割合 ①②日常的に家庭学習を行う生徒の割合 ①②各学期の欠点保有者数 ③日本語指導の実施状況 ③外部人材の活用状況	・85%の生徒が授業は分かり易いと捉えており、日常的に家庭学習を行う生徒は30%と少数ではあるが、65%の生徒が授業に意欲的に取り組んだため、欠点保有者は1学期10名(-9)2学期9名(-2)と昨年度より減少。その結果、転退学者は母国に帰国する生徒1名だけで、昨年度より5名減少した。 ・日本語を母語としない生徒への支援は地域ボランティアと日本語支援員によって週5日実施。学習サポーターも週3日活用。	B	本来は高い学力を持ちながら、病気や中学時代のいじめによる不登校で定時制に入学した生徒は意欲的に授業に取り組み、家庭学習を実施しているが、そうではない生徒は意欲的に日々の学習に取り組めていないようである。また、日本語が十分に理解できないために、学習に支障をきたす生徒もいる。これら全ての生徒の学習意欲を高めていくことが課題である。そのため、個々に適切な目標を持たせることが求められる。
2	現状 様々な理由で中学校までに不登校を経験した生徒が多いが、高校入学後も体調不良以外の理由で登校できない生徒が少なからずいる。 課題 生徒の抱える課題を把握し、地域や家庭と連携した教育活動を展開することで生徒が安心して登校できる環境づくりが求められる。	中学校や地域への情報発信と家庭や地域と連携した教育活動の推進	①中学校からの情報や担任・SCによる面談によって、生徒が抱える課題を把握し、SSWや地域機関と連携してその解決に取り組む。 ②地域の協力を得て、日本語を母語としない生徒への支援を実施する。	①長期欠席者の生徒数 ①保護者の学校理解度と満足度 ①②SSWや地域機関との連携状況 ③地域人材の活用状況	中学校や家庭との連携は十分に出来なかったが、長期欠席者の2名(2学期末現在)は体調不良によるもので学校不適應によるものではない。アンケートでも79%(+11pt)の生徒が心身の悩みに関する相談に適切に対応と回答しており、本校に入学して(させて)良かったという生徒は88%、保護者は94%と高評価を得られた。	A	長期欠席とまではいかないが、2学期末現在で欠席日数10日を超える生徒が3分の1弱いる。理由は様々であるが、生徒一人一人の実態を把握し、引き続き家庭や地域との連携、外部人材の活用によって登校しやすい環境を整えていくことが求められる。
3	【現状】 82%の生徒が学校行事や生徒会活動は楽しいと感じているものの、自分に満足している生徒は50%と学校生活の中で自己肯定感が高まっていない。 【課題】 学校行事や生徒会活動に目標を持って取り組ませることで達成感を味わわせ、自己肯定感を高めていくことが求められる。	意欲的に学校行事や生徒会活動に取り組む生徒の育成と自己肯定感の高揚	①担任による個別面談とスクールカウンセラーによる相談活動を通して、生徒が目的意識を持って学校生活を送れるよう支援していく。 ②生徒会役員を中心に、生徒の発想を生かした生徒会活動によって、生徒会行事を活性化させる。 ③4年間の見通しを持った進路指導で、卒業後の目標を持たせ、その達成を意識した学校生活を送らせる。	①自分に満足している生徒の割合 ②生徒会行事は楽しい、意欲的に参加しているという生徒の割合。 ②スクールカウンセラーの活用状況 ③卒業後の目標を持っている生徒の割合	生徒会活動は楽しいと感じる生徒は77%(-5pt)と微減だが、積極的に参加した生徒69%(+4pt)と微増。また、今の自分に満足している生徒は51%(+1pt)と昨年度と変わらないが、卒業の目標を持っている生徒は53%(+10pt)と、目標を持たせる指導では一定の成果が見られた。	B	今の自分に満足している生徒が半数と増えていないことから、引き続き自己肯定感を高める教育活動の実践が課題である。学習活動や学校行事で目標を持たせ、達成感を味わわせることが求められる。

学校関係者評価
実施日 令和6年2月10日
学校関係者からの意見・要望・評価等
<ul style="list-style-type: none"> ・中学でも起立性調節障害などの生徒は、年々増えてきている。血圧が低かったりして、朝起きることができないという生徒もいる。そのため、夕方からの学校に通うことを希望する生徒が一定数いる。そのような生徒の目標を達成できる教育を期待する。 ・現在中学校でも日本語を母語としない生徒が在籍している。一人一台タブレットによって、端末のアプリを活用すれば難なくコミュニケーションがとれるので、ぜひ活用を図って欲しい。
達成状況に家庭との連携は十分に出来なかったと表現されているが、保護者からすると、各担任が家庭と密に連絡を取って、子供が登校できるように働きかけていたと感じる。各担任と家庭とは十分な連携ができていたと思う。
所沢高校の校風自体が多様性を重視しているため、全日制と定時制の生徒双方にとってお互いの励みになるような取組等があれば、そこに両者が一つの校舎の中で時間は違っても共存している良さがあるのではないかと。是非この良さを活かして欲しい。

